コレンテ　vol. 41　n.360　novembre　2020

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊イタリア食文化紀行＊

～ヴェローナ編～

岡本　勇志

目を覚ますと、ボローニャのホテルにいることに気づく。

「よし、もう一度ボローニャを眺めてからヴェローナに行くか！」

そう、今日はヴェローナへ向かう日だ。

ただ、ヴェローナはあくまでヴェネツィアへ向かう途中の寄り道のような感覚だったため、他の街ほど気合が入っていなかった。

しかし、ヴェローナには『Amarone』という、収穫した葡萄を陰干しする伝統製法で作られる素晴らしいワインがある。ほかにも『Valpolicella』をはじめ、美味しいワインが生産される、イタリアを代表するワイン産地がある。なんと、このことを知ったのは日本に帰国してからで、実はヴェローナに辿りついた時はあまり詳しく知らなかったのである。それよりも、かの有名な『ロミオとジュリエット』の舞台となった街という印象の方が強かった。

いま思えば、あの時ヴェローナで『Amarone』を気がすむまで飲んでおけばよかったと、京都に帰って『Amarone』を飲むたびに後悔した。それほど『Amarone』はうまい。

しっかりとしたフルボディーながらタンニンの味わいが繊細で、陰干しされた葡萄の濃縮された旨み、香りが口いっぱいに広がる。ただしワイン自体が美味しすぎるので、料理との相性はよくよく考えなければならない。

少し話がそれたが、とにかく、ヴェローナへ向かった。

ボローニャから列車でヴェローナへ。

お昼前に到着したヴェローナは、地味でもなく派手すぎることもない、落ち着いた印象だった。まだお昼まで時間が少しあったので、ヴェローナの街を歩きながらロミオとジュリエットの舞台となった屋敷（現在は完全な観光地）へ向かう。

空は晴れ渡り、綺麗で、散策日和だった。

すると携帯に着信が。出てみると、トーディで働いていたレストランの皿洗いのおじさんからだった。彼とは、年齢は親子ほど離れているものの、ものすごく仲が良く、いつも冗談をとばし合いながら仕事をしていた。ちなみに parolaccia（スラング）のほとんどは彼から学んだ。

「Ancora sto a letto!!! Che vuoi!? Dove sei!??」

ん？まだ寝ている？？なんの用？？なにを言おうとしているのか、意図がわからなかった。

「Oh!!! Tu mi hai chiamato!! Non so che ancora stai dormendo o no!!」

そっちからかけてきておいて、寝てるかどうかなんて知らんがな！と言い返す。（あくまで仲が良いのでこのようなやりとりができる。実際はもっとひどい parolaccia でしゃべっていた）

「Ma che dici!!!!! Tu mi hai chiamato!!! Adesso non posso scherzare con te, voglio dormire un po' di più!!!!!」

向こうは私からかけてきたと言い張るのである。よくよくスマホを見たら、私が調べ物をした際に誤作動でかけていたようだ。

「Haha, scusami, colpa mia」

「Ma dai, niente. E quindi? Tutto bene?」

「Sì, tutto bene. Sono arrivato a Verona; sto facendo un giro」

「Bene! Divertiti!」

「Grazie! E tu? Tutto bene?」

「Sì, sì, sto bene come al solito. Tra un po' vado a lavorare, ma siccome non ci stai in cucina nostra ,un po' triste」

「Va bene. Torno tra un giorno」

「Ok. Allora buon viaggio e quando vuoi chiamami」

「Grazie e buon lavoro」

何ともイタリアらしい会話である。最初はどちらからかけたかで口論していたのに、最後はいつでも電話しておいでと。

今思えば、このように後に引きづらないイタリアのお国柄も好きだったのかもしれない。言いたいことをストレートに言い、間違っていたら謝り、もう気にしない。意外と単純で簡単なことのように思えるが、良くも悪くも相手のことを気にしてしまう性質の強い日本文化では些か難しいことかもしれない。

そんな電話をしながら、ヴェローナの街を歩く。人もみな落ち着いた様子だが、目的のロミオとジュリエットの館に向かうにつれて賑やかになってくる。広場に到着。何やら賑わっている様子の正体は広場に bancarelle（服屋、おもちゃ屋、お土産などを売る屋台）が多く出ていたのである。

その広場の先にシェイクスピアの像が見えた。さらにその先に小さな門があり、そこをくぐるとかの有名な窓辺へと辿りつくのである。この入口からすごい人ごみで、その9割がカップルである。そらそうだ、世界で一番有名な恋の聖地なのだから。男が一人で大きなリュックを背負ってくるところではなかった。が、とにかく一生に一度はと、しっかり見学をした。

さて、もう一度広場へ戻る。お昼にはもう少し時間がある。少し歩き疲れてきたし、陽が照って少々汗もかいたので、どうしたものかと思っていると、何やらビールを飲めそうな店を発見。小さな vineria だった。すかさず店に入り、ビールを注文。ふっと一息。うまい。店員さんから観光かい？と話しかけられ、会話が弾む。どこかいいレストランは？と聞くといくつか教えてくれた。

ビールを飲みほし、レストラン探しに街にくりだす。途中なにやら眺めの良さそうな塔を発見。せっかくだからと、登ることにした。上まで登ると、茶色の屋根が一面に広がるヴェローナのパノラマが素晴らしい。ただ、確かに綺麗ではあるが、やはり、自分が一年いたウンブリアの方が綺麗だなと、どこかでウンブリアびいきになっている自分に気づいた。

素晴らしい景色を眺めていると、無性に日本に帰りたくなくなってきた。

『ずっと、ここにいられたら。。もう少しイタリアで生活できたらな. . . 』そんなことを考えると少し寂しくなった。

気持ちを切り替え、レストランへ。レストランに到着するとあまり混んでいる様子はなく、すぐに席につくことができた。店内は昔ながらの雰囲気で落ち着いた感じがした。

注文したのは、茹で鳥のサラダとリゾット。このリゾットがすごく美味しかったのだが、後から知ることになる amarone をふんだんに使ったリゾットだったのである。どうりで見た目はまさに赤ワインの色で、しっかりとした味だった。あの時もう少し勉強していれば. . . と後悔を少々。

かなり贅沢なリゾットをたいらげ、もう一度ヴェローナの街へ。どこへ行こうかと少し調べると、なんとヴェローナにもローマにあるコロッセオのような旧闘技場の遺跡があるという。そこへ向かうことに。

フラフラと地図をたよりに目的地に到着。その遺跡はまるでコロッセオだったが、感覚的にはコロッセオよりは少し小さい気がした。ちなみにヴェローナではアレーナと言うらしい。

このような遺跡を訪れると、いつも自分の語学力不足を痛感させられる。遺跡の説明の看板などがあまり理解できないのである。

少し話がそれるが、私は自分でも少し特殊なイタリア語の学び方をしたと思う。トーディでの一年の生活で「感覚的に」イタリア語を理解することには長けた。たとえ話している相手の言葉の半分がわからなくても、今このようなことが言いたいのか、このような言い回しでこの言葉を使うのかなど、あまり単語を知らない中で「感覚的に」理解し、そ

れを真似て学習してきた。

それは、レストランの厨房という無理矢理にも相手の言葉を理解し、即行動しなければならない環境にいたのも大きく影響していただろう。

だからイタリア人とほぼ同じスピードやリズム、イントネーションで話すことができたし、対面であれば理解することもできた。特にウンブリアの田舎だったため、方言も同じ語学学校に通っていた同級生の誰よりも理解し正しく使うことができた。（イタリアでは、方言は汚い言葉とみなされるため、あまり公の場で使うのは良くないのだが。）

しかし、ここに大きな落とし穴があった。まずテレビやラジオを理解するのが難しかった。そして看板もしかり。読書もできない。活字を読む力が乏しいのだ。

かつて日本でもイタリアでも、話すことはできても読み書きができない人がいたというが、その感覚がわかる気がする。

よって、この旅のあいだ、遺跡や観光名所で説明板など目にすると少し後悔した。もっと勉強していればなと。

そんなことを考えながら、アレーナを後にホテルへ。ホテルで一息つき、夜のレストランへと、再びヴェローナの街へ繰り出すと、川面に夕日が照らされて、とても綺麗な景色だった。

川沿いを歩きながらレストランに到着。注文したのは、ポレンタとチーズの盛り合わせ（北イタリアではポレンタを前菜として出すことが多い）に、手打ちパスタと猪の煮込み。北イタリアの郷土料理を堪能した。

そして、いよいよ明日はヴェネツィア。

小さい頃から行きたくてたまらなかったあのヴェネツィア。

海に浮かぶ島。いつかテレビ番組で見たあの列車の車窓からアドリア海に浮かび上がってきたあのヴェネツィア。

前日のヴェローナの夜から、頭の中はヴェネツィアのことでいっぱいだった。

最高の海の幸と景色を求めて。胸の高まりとともに、ヴェローナのホテルに戻った。

【ポレンタとチーズの盛り合わせ】

（当館元留学生）

～レストランご紹介～

京都下鴨　ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101
アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」
下車 目の前
Tel：075-781-0028
HP: https://www.botechin.com

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
（特典期間：2020 年 11 月末まで）

きれいになった大通りを歩こう

深草　真由子

『遠い太鼓』（講談社）という南ヨーロッパのスケッチ集を読んでいる。どうやら著者の村上春樹氏はイタリアでなかなか大変な思いをしたみたいだ。1986 年から 1989 年の三年間、彼はローマに拠点をすえつつ、気にいった場所があればそこにアパートを借りて住み、また別の場所が気にいればそこに移って住む、というふうに、旅をしながら暮らした。

イタリアはみなさんもご存じのように、旅人にとってはたいへん魅力的な国である。けれどもそこで暮らすことになった者にとっては、はたしてどうだろう。

しばらく滞在したパレルモについて村上は、彼にしてはめずらしくキッパリとした言い方で、「醜悪」だの「ろくでもない街」だのと評している。無理もないだろう。そこではそのころマフィアがらみの殺人事件が毎日のように起きていたのだから。

そういうわけで彼は、イタリアでできればここには暮らしたくないと思う場所として、シチリアをまず一番にあげている。「根性を据えて骨を埋めるくらいの気で行くならともかく、正直に言ってよそものをすんなり受け入れてくれるところではない」と。

それとおなじような理由でカラブリアももうひとつ気が進まないらしい。「長靴の爪先あたり」のどこで何を見たのかについて、彼は一行も書いていないけれど。

穴ぼこだらけの道を走るバスの中でそのページを読んで、深いため息をついた。私、そのカラブリアに住んでいるんですよ、やれやれ！

そこで実際に生活している者としては、たしかにいろいろと難しいところです、と言うしかない。

一人あたりの収入、就業率、高校卒業率、インフラなど、生活の質の指標となるようなどんなデータをみても、イタリアの全二十州のあいだでほぼいつもビリ争いをしているくらいなんだから。ンドランゲタとよばれるマフィアがこの地域の経済を蝕んでいる。人々は貧しく、仕事を求めてローマやミラノ、あるいは外国に出ていく。「よそもの」はもとよりここで生まれ育った者たちでさえ、自分の居場所を見つけるのに苦労しているのだ。

けれどもネガティブな評判ばかりがたつのは私の望むところではないので、今これからバスで向かっているコゼンツァの街をひとつ紹介してみようかと思う。

というのも私は、この地方をもっと住みやすいところにするために忍耐強くがんばっている人たちの姿を目にしてきたのだから。それに実際のところ、コゼンツァの中心部はこの一年か二年のあいだに見違えるほど良くなった。長いあいだつづいていた工事が終わり、悪臭を放っていたゴミ山が取りのぞかれた（すこし郊外に出るとまだあちこちにあるが）。そして大通り（コルソ）がようやく街の顔らしくなって、気持ちよく散歩ができるようになった。村上春樹がもし今ここに来たら、ちょっとびっくりするかもしれない。

【コゼンツァの旧市街】

コゼンツァは人口七万人弱の都市で、カラブリア州の北部コゼンツァ県の県都である。ローマからだとフレッチャロッサとレジョナーレを乗りついで四時間半くらい。海から吹く涼しい風は山にさえぎられて届かないため、夏はかなり暑くなる。

町の起源は、二本の川の交わるこの地にブルッティ人が定住しはじめた紀元前四世紀にさかのぼる。それからローマ人に征服されるまでのあいだ、この地方にあったギリシャ植民都市を支配下におく有力な町として繁栄した。

バスを降り、広いターミナル・ステーションを出る

と、そこからすぐにコルソ・マッツィーニがはじまる。このあたりがコゼンツァでもっとも活気のあるゾーンで、カフェでくつろいだり、木陰のベンチに座っておしゃべりしたりするのがコゼンティーニの日課である。書類を抱えて早足で歩く弁護士風の人、服屋のショーウインドーをのぞいている婦人、キックスケーターで勢いよく駆けぬけていく元気いっぱいの高校生。ここまではまあよくある光景である。

しかし、ふつうのショッピング街とちがうのは、この通りが museo all'aperto（野外美術館）としても機能していることだ。アメリカに移住して成功した実業家から市に寄贈された作品がそのコレクションで、サルバドール・ダリ、ジョルジョ・デ・キリコ、アメデオ・モディリアーニ、エミリオ・グレコなど、二十世紀の美術史を飾る芸術家の名がならぶ。もちろんチケットはいらない。閉館時刻も心配しなくていい。屋台で買った焼き栗をほおばりながらぶらぶら見てまわることのできる、気楽な美術館である。

コルソをもうすこし先に行くと、ビルとビルのあいだから、空にむかって何かがニョキっと突きでているのがみえる。この巨大な建造物はヨーロッパでもっとも背の高い塔をもつ橋で、バレンシア生まれのアルキスター（スター級のアルキテット）サンティアゴ・カラトラバによって設計された。芸術とよぶにふさわしい見事な橋で、「この規模の地方都市にまさかこんなに立派なものが」と誰もがおどろくほどのものだ。

【2018 年に開通したパオラの聖フランチェスコ橋】

カラトラバ橋と皆によばれているこの橋は、正式には「パオラの聖フランチェスコ橋」という。コゼンツァのとなりパオラで生まれたこの聖人は十五世紀の人で、アッシジなどを巡礼したあと生まれ故郷にもどって隠遁生活に入り、ミニモ会という托鉢修道会をひらいた。マントに乗ってメッシーナ海峡をわたったと語りつがれている。

『太陽の都』で知られる哲学者トンマーゾ・カンパネッラも滞在した、バラ窓のきれいなサン・ドメニコ教会の前を通りすぎ、ブゼント川にかかる橋をわたると、ここからコゼンツァの旧市街に入る。老舗のアイスクリーム屋と地ビールを出すパブのある角を左に曲がると、車が一台やっと通れるくらいの幅のせまい坂道が丘の頂上までのびている。

沿道の建物はどれも見るからに古い。いかにもイタリアの歴史的地区らしい、セピア色の絵葉書にでもなりそうな街並みである。

雰囲気はたしかに悪くはないのだが、問題は過疎化である。商店の看板は字が読めないほど朽ち果て、シャッターは閉まったまま錆びついている。メンテナンスが十分でなく（というよりほぼ手付かずなのだろう）、チェントロのパラッツォが崩壊したというニュースをこれまでに何度か耳にした。ドゥオーモや役所、図書館など重要な施設があるにもかかわらず、道を行く人はほとんどいない。

しかし、おもしろい「動き」もある。

まず、漫画ミュージアムができた。常設の展示以外にワークショップが定期的にひらかれていて、漫画の作り方やイラストをプロが直接教えてくれる。

それから、空いていたテナントに工房がいくつか入った。産婦人科医の両親とはまったく異なる道をえらんでリュート職人をやっている若者の工房や、物理学で大学を卒業したあと家業を継いだ織物職人の工房などである。

ガラス戸から仕事のようすをそっとのぞいていると、「どうぞどうぞ」と言って中に招き入れてくれた。カラブリアの芸術や方言など、この地方に関連する書籍を専門においている店もある。ここで私は町のすべての教会、修道院、信者会の歴史資料をまとめた、1933 年出版の本を買った。坂をのぼる途中で色鮮やかなムラーレスも見つけた。旧市街の没落にアートの力で抵抗する誰かがいる、ということだ。

大司教館の前は見晴らしがよい。むこうの丘には、未来派の芸術家ウンベルト・ボッチョーニの作品を所蔵する国立美術館がみえる。『空間における連続性の唯一の形態』というのが傑作とされていて貴重なものらしいのだが、それが置かれたさらに奥の部屋にあるデッサンのコレクションもおもしろかった。

美術館の下を流れる川にそって並んでいる立方体の箱は、ボックスアート村のレジデンスである。世界各国からやってきたアーティストが一定期間住み、創作に没頭する場所だ。背後の深緑の山は「霊感をそなえた "di spirito profetico dotato"（ダンテ『神曲』天国篇十二歌）」ジョアッキーノ・ダ・フィオーレが修道院をひらいたシーラである。反キリストの出現と歴史の終焉が信じられていた十二世紀後半、この神学者は聖書にあらたな解釈をくわえ、「聖霊の時代」の到来は近いと説いた。混乱が過ぎ去ったのち、平和で愛にみちた、完成された世界がかならず実現する、と。

【大通りに展示されているモディリアーニの作品】

坂をのぼりきると、テアトロがそびえたつ三月十五日広場に到着する。この町が生んだ哲学者ベルナルディーノ・テレージオの像の下に腰をかけてひと休みをしながら、南イタリアの学問の都「カラブリアのアテネ」として名をはせた十六世紀のコゼンツァを思い描いてみる。さて、二十一世紀のコゼンツァはどうなるのだろうか。人々の地道な努力が実り、我慢がむくわれる日が来るとよいのだけれど。Speriamo bene.

（元当館スタッフ）

～会館だより～

＜オンラインレッスン始めました＞

zoom を使用したマンツーマン（1対1）のオンラインレッスンです。こんな方におススメ！

・関西圏以外や外国にお住まいでイタリア会館での対面レッスンが受けられない方

・この時期の公共交通機関のご利用に不安がある方

※受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。

＜文法動画配信中＞

イタリア会館のノウハウをギュッと濃縮した動画を公開しております。リスニングや文法など、ぜひ学習にお役立てください。

編集・発行 /（公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/